

質保証のために分野が連携した 授業改善の提案

地域で学ぶ・卒業論文出版プロジェクト

創価大学 碓井健寛

碓井ゼミ4年：藤崎碧咲、宮田明美、
山根治美、芳井ひかり

アウトライン

- 大学・学部教育の大きな流れ
 - 創価大学のSGU採択
 - 学部教育の特徴
 - 大学が用意する学習支援メニュー
- 残された課題
 - グローバル教育というメインストリームから外れた学生たち
- 地域で学ぶ・卒業論文出版プロジェクト
 - 取組内容の紹介
 - 出版プロジェクトの運営方法を説明
 - リレートーク
- まとめ

大学・学部教育の大きな流れ

スーパーグローバル大学創成支援 タイプB採択(グローバル化牽引型)

「人間教育の世界的拠点の構築－平和と持続可能な繁栄を先導する『世界市民』教育プログラム」事業

- 「グローバル・モビリティ」外国人留学生や海外派遣日本人学生などの拡大を目指す
- 「グローバル・ラーニング」教育プログラムの国際的通用性の向上を図る
- 「グローバル・アドミニストレーション」学内ガバナンスのグローバル化や学内会議・文書等の多言語化
- 「グローバル・コア」教育・研究におけるグローバル化の推進を総合的に担う

学部教育の特徴

International Program(必修ではないが7割程度の学生が受講)

- 英語力を高めつつ同時並行で日本語・英語での専門教育を行う
- 海外留学レベルの英語力(1700時間を2年間のカリキュラムで)
- 習熟度別

IP海外グローバル研修

- シンガポール・カリフォルニア

海外インターン

- 香港(3週間)・クアラルンプール(4週間)

経済学部 of 英語教育の歩み

2001年

International
Program(IP)開始

- 経済学を英語で学ぶ

2009年

Japan Asia
Program(JAS)開始

- 留学生と英語で学ぶ

2015年

SUCCEED開始

- 専門科目をすべて英語で履修できる

Diploma Policy, Learning out-come に沿ったカリキュラム編成

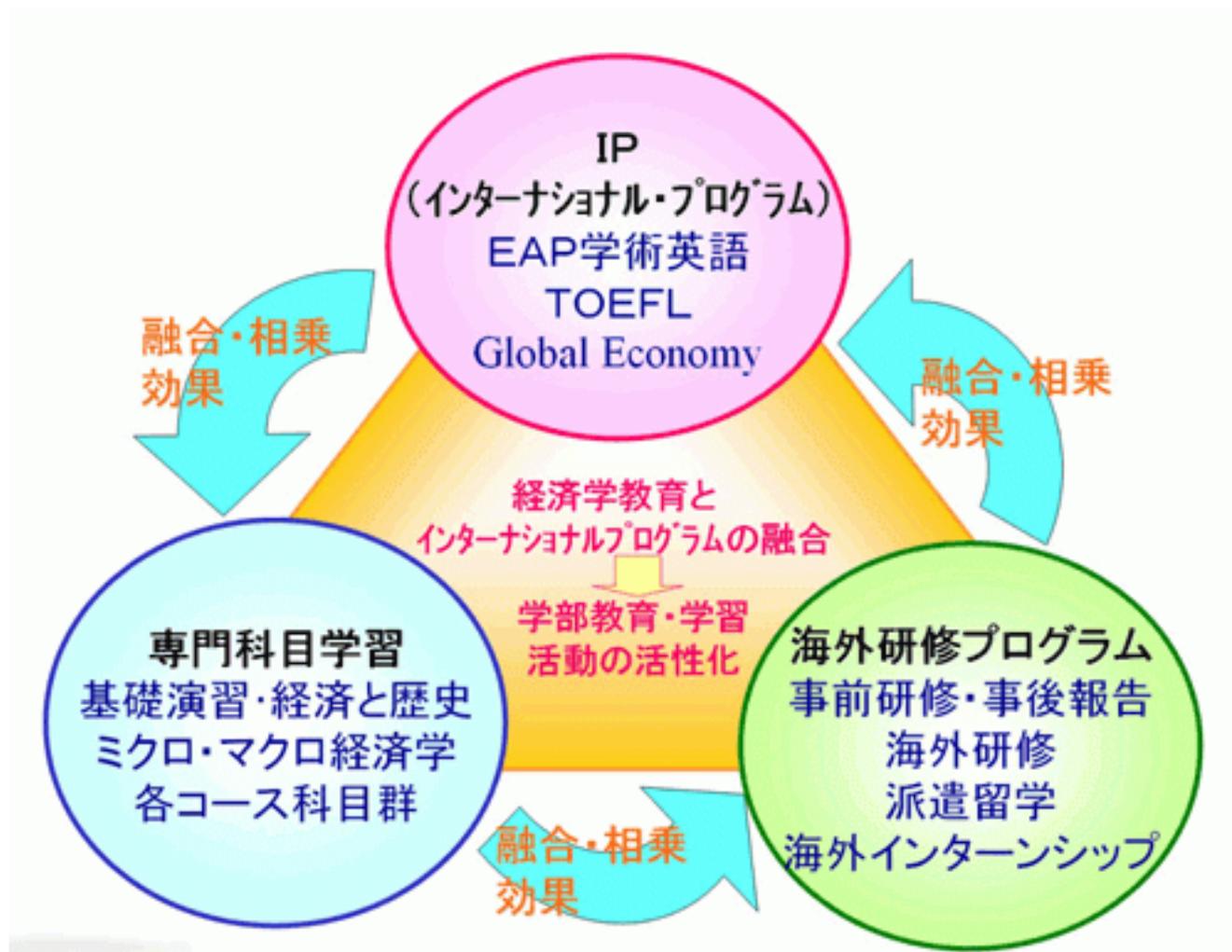
- CCL(カリキュラムチェックリスト)を用いた学部教育の体系性の検証

学力に応じた科目設定や多様な学生層に対応

- 再履修クラス(ミクロ経済学・マクロ経済学)
- オーナーズセミナー

SUCCEED(Soka University Courses of Comprehensive Economic Education)

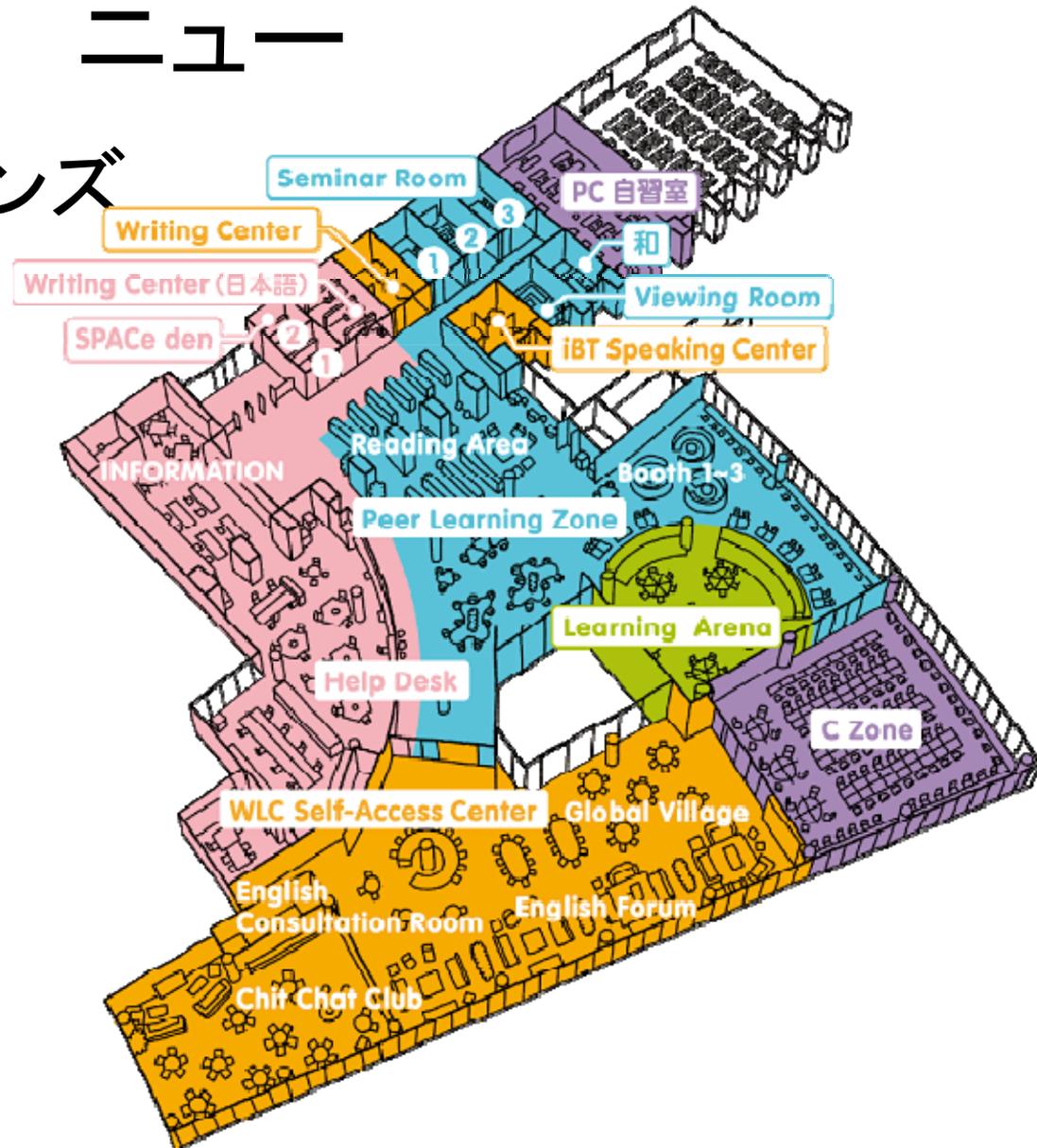
- 英語で専門科目をすべて履修できる
- IP、JASプログラムの発展
- 国際化のなかで学部の生き残りのための戦略



経済学部ウェブサイトより

大学が用意している学習支援メニュー

- ラーニングコモンズ
SPACE



残された課題

残された課題

- メインストリーム(グローバル教育)から外れた学生たちをどうするか？
 - International Program(英語で経済学を学ぶ)からドロップアウトした学生たち
 - 最初からInternational Programに属さない学生たちも

IPをドロップアウトした 学生にインタビュー

ドロップアウトした理由は何ですか？

ドロップアウトしたことで、疎外感や喪失感を感じたことはあるか

「ある」の場合、どのような疎外感や喪失感があったのか

「ない」の場合、なぜ疎外感や喪失感がなかったのか

ケース1:期待はずれ

ドロップアウトした理由

- 英語力がついたというよりも、課題をこなす力しかついていないなと思ったから

疎外感・喪失感は？

- なかった。(短大からの)編入組としてIPを受けていたので、周りの子たちは経済学部生の後輩だし、最初から経済学部生だった同期はIPを受け終わってるので
- もし(1年次から)同期と受けてたら疎外感や喪失感は感じてたかもしれません

ケース2: 他にやりたいことが

ドロップアウトした理由

- 他にやりたいことができた。
- 両立が難しかったから。

疎外感・喪失感は？

- なかった。自ら希望してドロップしたから、すっきりしていた。
- むしろ、続けてる人に「よくやってるね、ご苦労様」と言いたい思いだった。

ケース3:モチベーションの喪失

ドロップアウトした理由

- スコアも足りなかったし、魅力を感じなくなったため。
- 他の勉強や活動に費やしたい時間が増えてきたため。

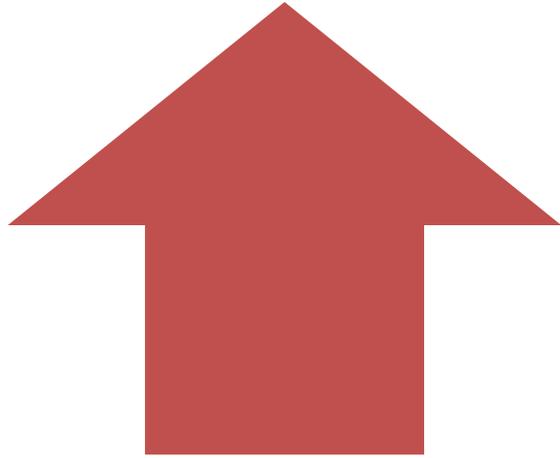
疎外感・喪失感は？

- あった。今まで一緒だった友人と疎遠になったり、周りほど勉強をしていない気がして劣等感を感じた
- IPを継続して履修しているメンバーと行動パターンが全く異なったため、今まで付き合ってた人たちと顔をあわせる機会がめっきり減った

残された課題

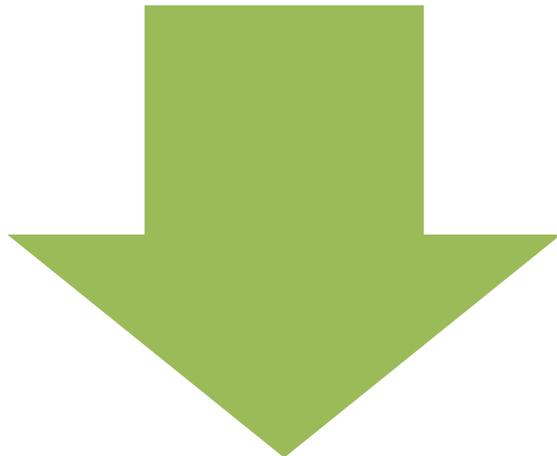
- IPドロップアウトの学生への組織的な支援の必要性
 - 演習科目(2年後期～4年後期)
 - 多様な軸による学びの受け皿を用意する
 - 英語だけではない(経済学部も弱点かも)
 - 成績不振者面談
 - 喪失から、学びの自己肯定
 - どのような受け皿が必要か？

IP以外の学びに対して積極的に肯定するポジション



グローバル

- 英語のスコア重視
- GPAのとりやすい科目重視
- 海外で学ぶ



ローカル

- スコア不要
- 必要な学びを重視
- 地域(大学の外)で学ぶ

メインストリームの流れをディスるポジションも(ほんの少し)

地域で学ぶ・卒業論文出版プロジェクト

卒業論文プロジェクトの概要

フィールドワークによる卒論を書く

個人研究だがゼミの学生の間で共通する
テーマ

研究成果を社会に発信

スケジュール

2月

- 学生の発案によりプロジェクト始動

3～7月

- フィールドワーク期間

8～12月

- 執筆期間

4月1日 発売予定

- 仮タイトル『わたしたちの居場所～卒業論文出版プロジェクト』

それまでは？

- 2年後期
 - ゼミがスタートする前の夏休みゼミ合宿で大阪・西成区釜ヶ崎(あいりん地区)でフィールドワーク
 - ゼミスタート
 - 佐藤郁哉『フィールドワークー書を持って街へ出よう』
- 3年前期・後期
 - 毎週1回以上フィールドワークを実施し、フィールドノーツの提出
 - 場所は自由(私からも情報提供をする)
 - ゼミで共有する

卒業論文プロジェクトの概要

フィールドワークによる卒論を書く

- 量的調査・提案型プレゼンとは真逆のポジション
- 大学を離れた現場で、困りごとを抱えている当事者や支援者からまなぶ
- それぞれのフィールドワーク先には単独で行く
- 週1ペースで

< 「ここ、あいてますよ」の検索結果に戻る



創価大学
碓井健寛(ゼミナール)編



ここ、あいてますよ: ディスポニブルな場をつくる Kindle版

碓井健寛 (編集)

[カスタマーレビューを書きませんか？](#)

すべてのフォーマットおよびエディションを表示する

Kindle版

¥ 500

[今すぐお読みいただけます: 無料アプリ](#)

--- まえがきより---

本書は、学生が居場所に通いながら書いたルポルタージュである。

居場所に通うことで、学生たちは、さまざまなことがひとごとでなくなりました。

たとえば6人に1人が子どもの貧困状態にある、という新聞記事を見ると、子どもたちの言葉や暮らしが目に浮かんで来て、心がざわついてしまう。単なる数字や、わかりにくい事象が、自分ごととして深く実感することができるようになった。

ディスポニブル(disponible)というのは、フランス語で「利用可能な」という意味がある。自分のそばにそういう場所を作って提供するという感があり、また、フラットな思いやりという感じもある。

--- あとがきより---

私たちが見てきたもの、社会の人達に伝えられないかな？

そんな思いから始まった、本を作成するプロジェクト。

Kindle 価格: **¥ 500**

販売: Amazon Services
International, Inc.

 1-Clickで今すぐ買う®

Kindle または他の端末に配信

無料サンプルを送信

Kindle または他の端末に配信

ほしい物リストに追加する

[プロモーションコードまたはギフトカード
を入力してください](#)

シェアする    

- 碓井健寛(ゼミナール)編 (2016)『[ここ、あいて
ますよ](#) ディスポニードブルな場をつくる』
Kindle版

プロジェクトの概要

個人研究だがゼミの学生の間で共通するテーマ

- 貧困・社会的孤立について
- ビジネスコンテスト型の共同研究とは真逆のポジション

プロジェクトの概要

研究成果を社会に発信

- Kindleで出版（出版にかかる固定費用がゼロ）
- 社会的排除の問題や居場所づくりの重要性を知ってもらいたい

出版する本の形式

解説文つきルポルタージュ形式

- 問題の背景などを解説文として付与するが本文のルポだけでも自己完結させる

字数

- 2万字程度

6章立て

電子書籍の形式で(Kindle)

対象：さまざまな居場所づくりの現場

元ホームレス・精神疾患をもつひとびとの居場所

シングルマザーや子どもたちの居場所

外国にルーツをもつ子どもたちの居場所

障がいをもつひとびとがはたらく場

学生のリレートーク

- なぜその居場所を選んだのか？
- なぜその居場所が重要なのか？
- どのような気づきがあったのか？

宮田明美さん(4年)

池袋のホームレスを調査して明らかになったこと・・・

- 知的障害の疑いがある人が**34%** (3人に1人)
- 初めて自分に障害があると分かった人が**大半**

周囲には分かりにくい軽度の知的障害を抱えるが故に

- 周囲の人と上手く関係を築けない
- 仕事が長く続かない
- 必要な支援に繋がりにくい などの障壁がある・・・

結果：地域で居場所をなくし、金銭的にも困窮し、ホームレスへ

べてぶくろとは・・・

べてる×いけぶくろ=べてぶくろ

私がべてぶくろに興味を持ったのは...
父がリストラにあい、ホームレスや失業が
他人事とは思えなくなったから

べてるとは・・・

- 精神障害を抱えた当事者の地域活動拠点

べてぶくろは・・・

べてぶくろでは「べてる」が大事にしているものを受け継ぎつつ、**東京・池袋をスタート地点**として、共同住居やグループホームの運営、食事会、べてるの商品販売等をはじめ、独自の活動を広げている



食事会

- 参加者は統合失調症の方、グループホームに住む方、女装されている方、フリーターの方、元ホームレスの方 etc..
- 雰囲気は「拒絶されるわけでもないけど、歓迎されるわけでもない」。個性を活かす場というよりは、個性を殺さない場という感じ。そこがべてぶくろの雰囲気の良さに繋がる。



芳井ひかりさん(4年)

「要町あさやけ子ども食堂」

子どもが1人でも入れる食堂@豊島区要町/一食300円/月2回(第1・3水曜日)

〈子ども食堂での半日〉

- 15時 スタッフが集まり料理長が考えたレシピを基に調理を始める。(スタッフ15人ほど)
- 17時半 開店。子どもたちが続々とやってくる。(子ども10~20人)
- 来た人から受付にて食券(一食300円)購入し、食事を食べる。食べ終わった子どもたちは2階で遊ぶ(宝探しゲーム、室内野球、トランプなど)
- 19時 食券販売終了(毎回50~60食売れる)
- 子どもたちがお母さんたちと一緒に帰り始める。
- 20時 閉店。片付け。

〈ある日の夜ご飯〉

麻婆丼、キュウリの青さและ、野菜炒め、リンゴ



▶ なぜその居場所を選んだのか?

きっかけ:子どもが好き

行ってみて通おうと思った理由:

その場所の温かさ(人・ごはん・空間)

→居心地の良さを感じた

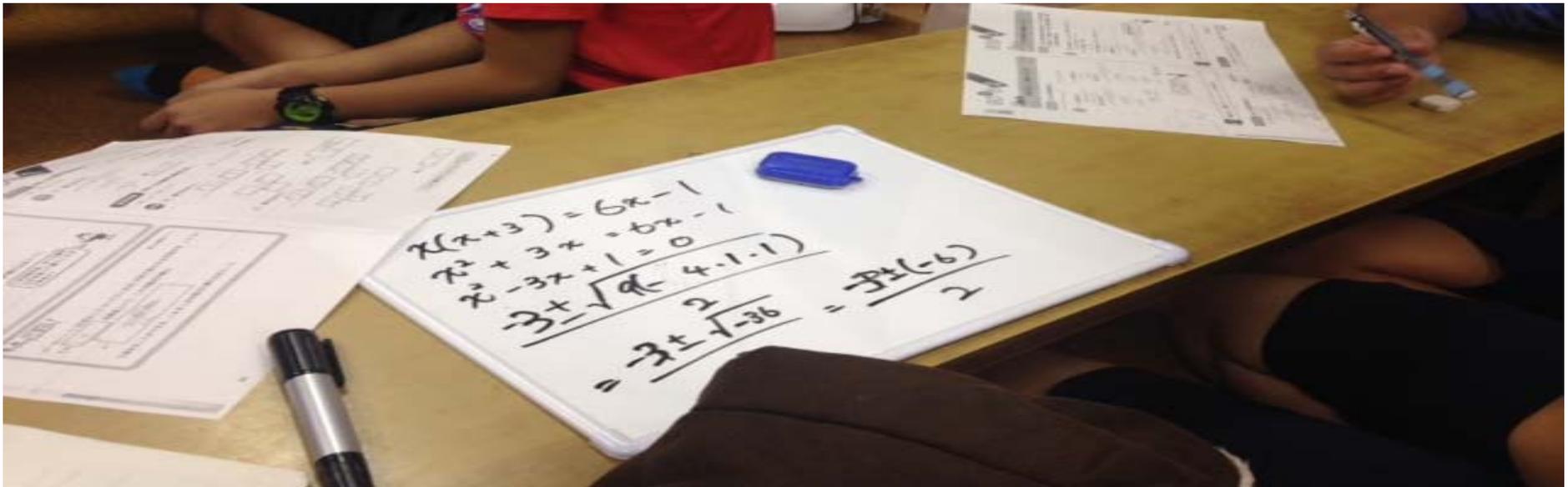
▶ 子ども食堂でのエピソード



山根治美さん(4年)

つるみえんぴつの会

- ・外国にルーツのある子どもたちの居場所
- ・週3回夜間に地域の学童などで開催
- ・日本語学習や学校の宿題を一緒にやる
- ・学校の先生や家庭以外の大人との関わり
- ・似たような環境にいる子と交流



子どもたちの環境(一例)

- 親の仕事の関係で来日
- 両親が日本語が話せない
- 日本の習慣があまり分からない
- 学校のクラスに馴染みづらい
- 兄弟が多く、世話を見なければならぬ etc.

家庭や学校以外で

親身にサポートしてくれる場所が必要

藤崎碧咲さん(4年)

フィールドワーク先： いちよう企画（古本のネット販売）

なぜその居場所を選んだのか？

- ・ 就労支援に興味を持ったことがきっかけ
就労支援施設で働く方（利用者さん）たちが、
社会の中で自分にできることをどうやって見つけていくのか
その過程が気になったので

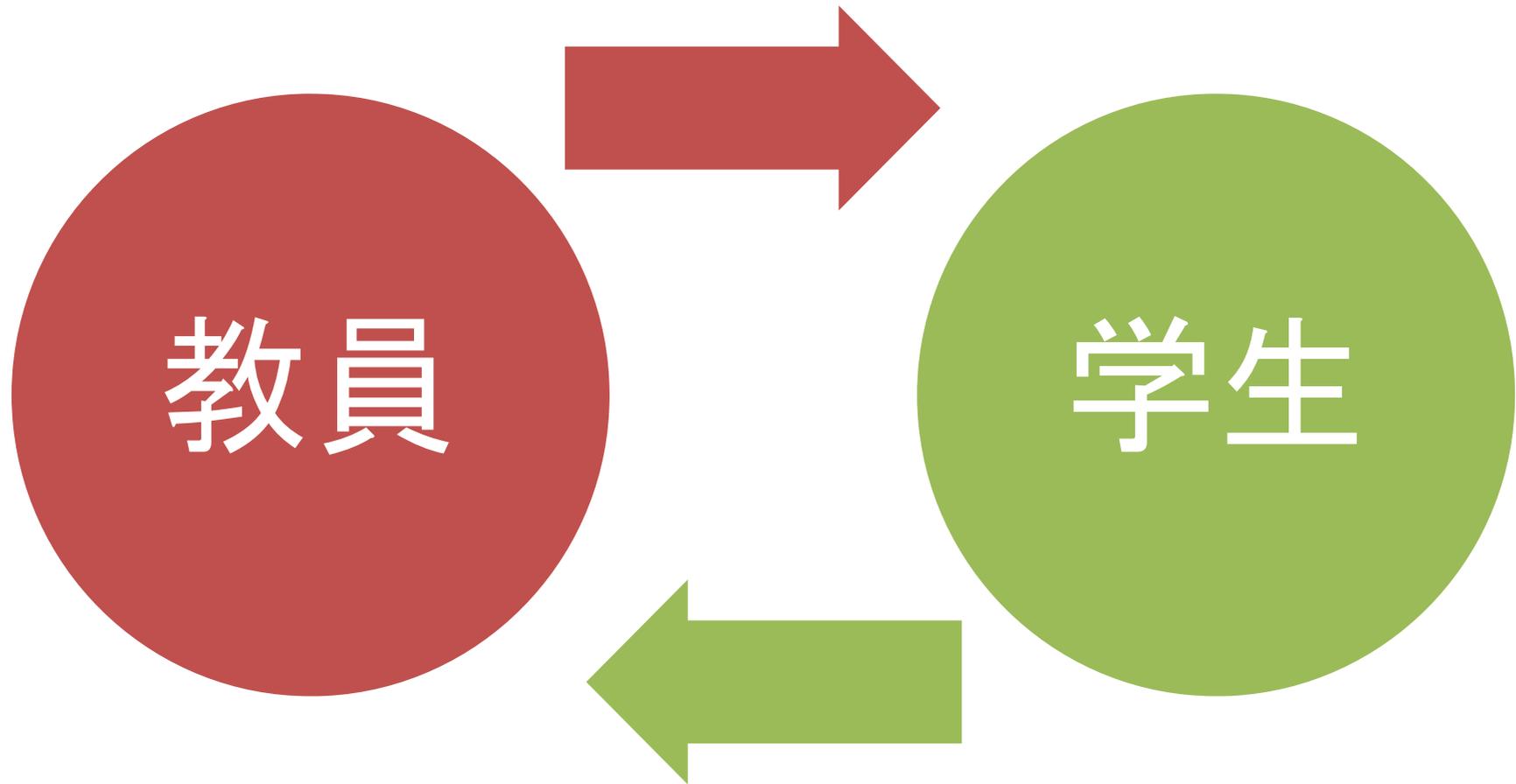
なぜその居場所が（社会的に見て）重要なのか

- ・ 人が仕事に合わせるのではなく、
仕事人が人に合うような、働く形だから
社会の中で邪魔だと思われる人が減ると思う

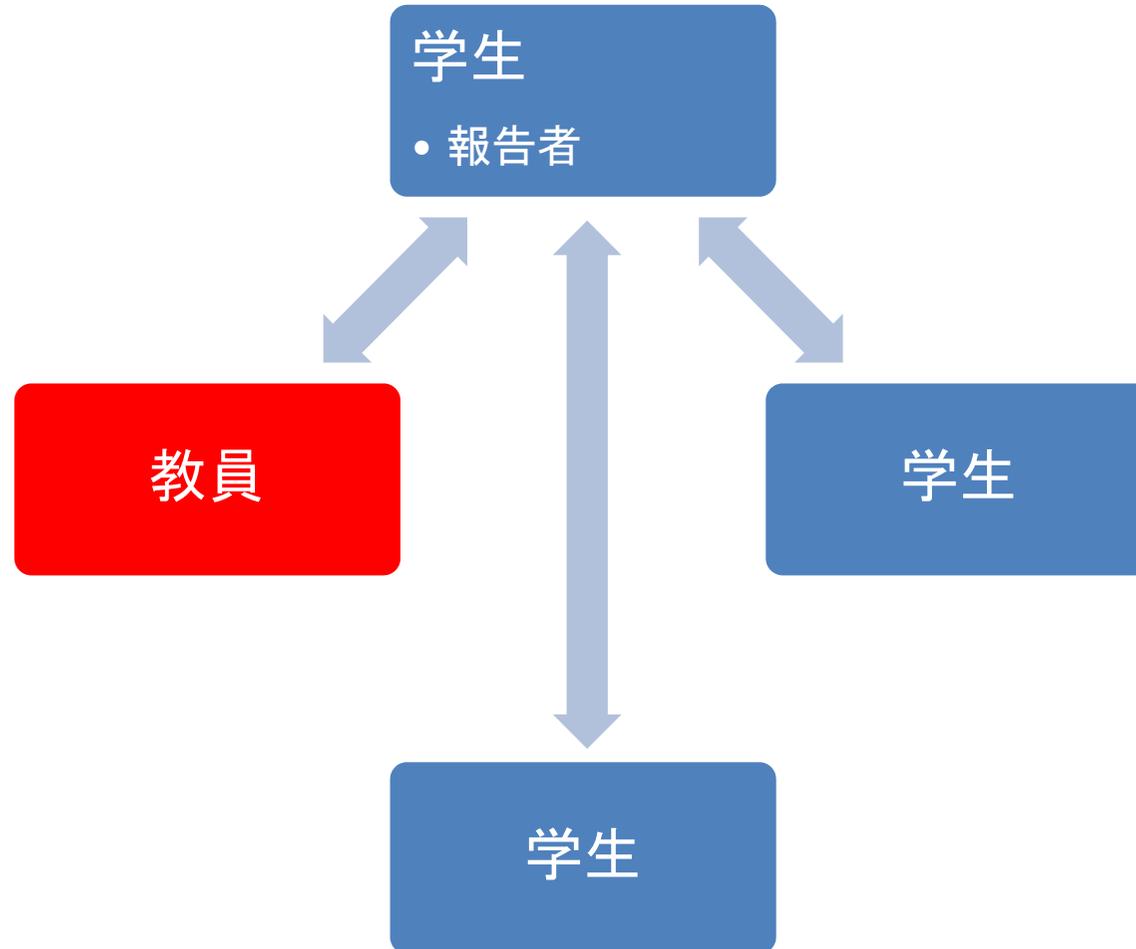
運営に関わってみてどのような気づきがあったのか？

まとめ

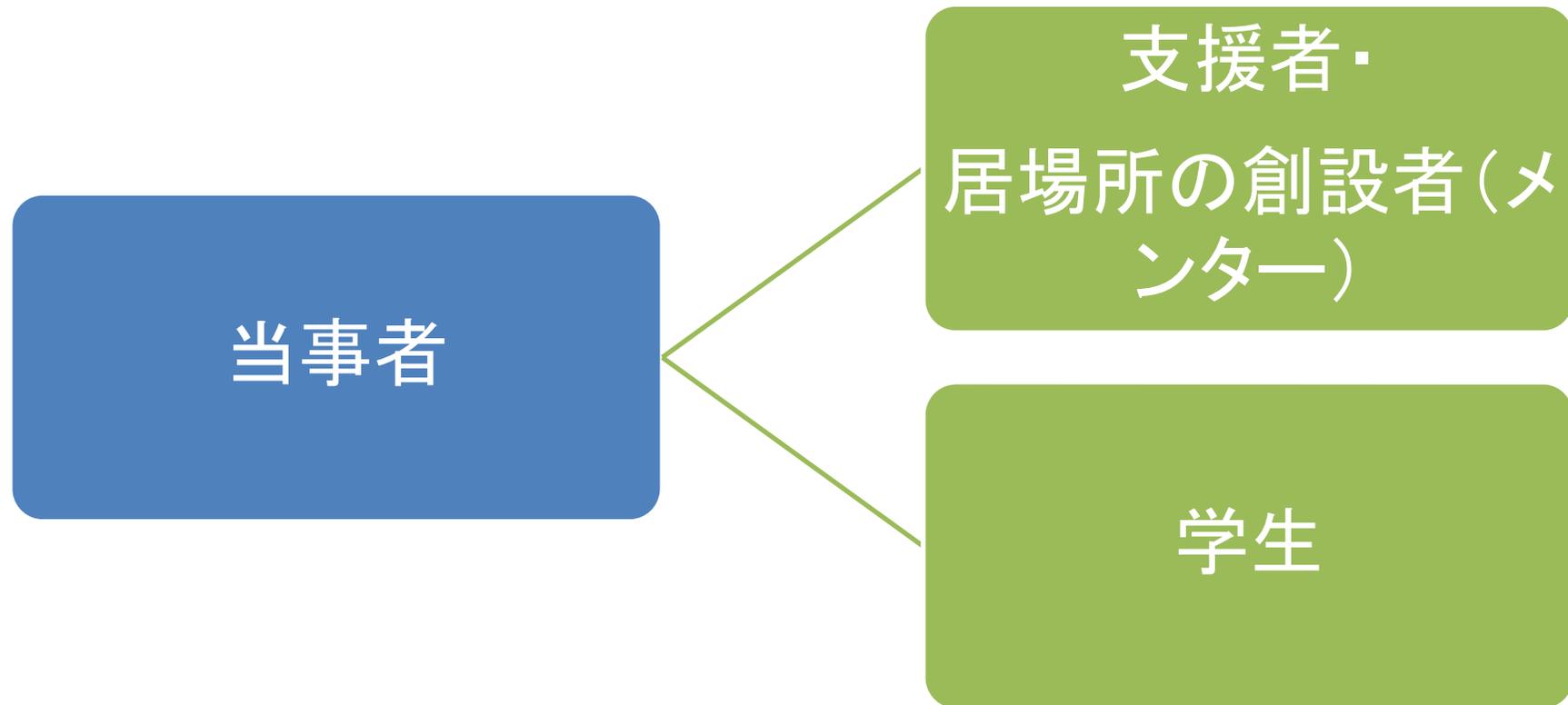
従来の卒論(私の場合)



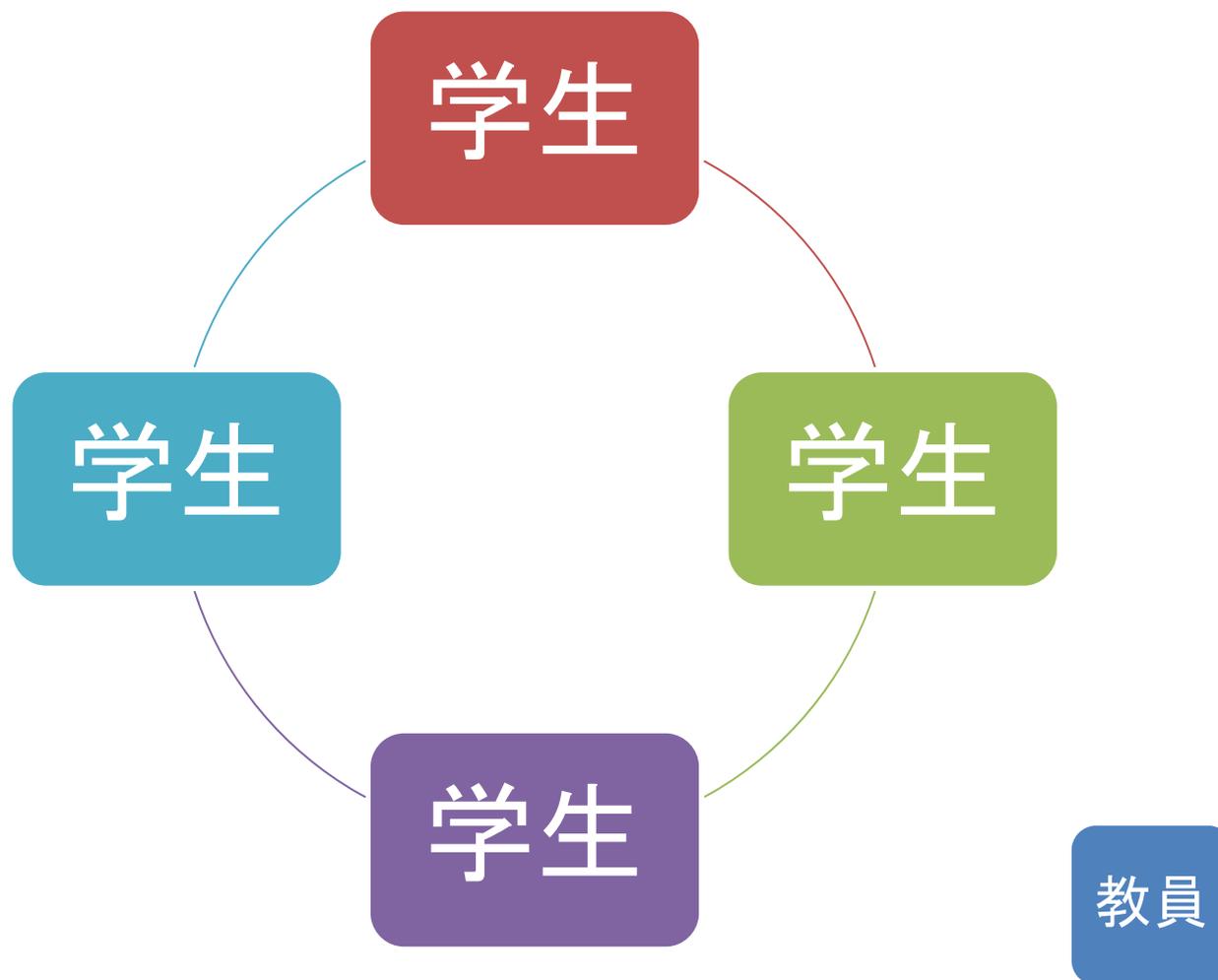
従来の卒論(私の場合)



卒論出版プロジェクト (フィールドワーク先での関係)



卒論出版プロジェクト(ゼミでの関係)



私たちが工夫したこと

- 学びの場をコーディネート
 - 社会から必要とされる自分の居場所
 - 喪失から獲得へ
 - ひとりひとりが独自性のある体験ができる
 - 「個」での取組だが「孤」ではない
 - 困りごとを抱える当事者をつながる
 - 支援する側にまわることができる
 - 「ピアプレッシャー」ではなく「ピアサポート」
 - 共感できる仲間の存在
 - ピアサポートの場
- ルールの設定（締切の厳守）
 - 教員からのプレッシャーは使える
 - しかしそれだけでは不足
 - 社会的なプレッシャーを活用

今後の課題

- 卒論プロジェクトに参加しなかったゼミ生も
 - － 学生の判断基準
 - テーマと関心があうかどうか
 - コミットできる時間
- 経済学とは関係がない(むしろ社会学的な)
 - － 経済学に関心を持たせられなかったという意味で教員の責任ではあるが、
 - － ある意味、短期的な緊急対応
 - － 一方で教員の興味(社会的排除と貧困)と合致